

M E S S A G E

よみがえれ都の美

京都に生まれ育って、大学時代は東京で過ごしたが、そのあとはずっと京都で暮らしながら、仕事で頻りに東京と往復している。

私の仕事は植物染の工房を主宰して、花や実や根とか樹皮にひそむ色をくみだして、日本の古来からの伝統色を再現している。

色や意匠を扱う仕事柄、自分が生み出す色だけではなく、季節それぞれの草木花の彩りや洛中洛外の街の佇まいが気になるのである。ときおり私は都の景色を見ようとして、小高い丘にのぼって、市中を遠くから眺めることがある。三方を山で囲まれた小さな盆地、京都は町そのものが箱庭のようである。

遠くからこの町を見ていると、自然と人工が千二百年あまりの歳月のあいだに融合して造り上げられてきた都であることがよく理解できる。

私の子供の頃、昭和三十年前後の京都の町はこのうえなく美しく清潔であった、という残像がいまもまぶたにある。そのころ洛外の伏見の里に移り住んだが、家から少し歩けば柿の木にかこまれた畑が広がっていて、農家の人は近くの小川で収穫したばかりの野菜を洗って軒下にならべていた。

また、西陣の親戚の家に行くと、通りには大きな弁柄格子の商家があってその造りに魅せられたり、長屋のつづく小路を歩けば機音が響いていた。どこも人々の暮

らしが息づいていて、人肌の温かさの佇まいがあったのである。

ところが、近頃は、街中を歩いても、かつてのように三方の山々のすがたを眺めることができなくなってきた。高いビルが景色を塞いでいる。それに、木と土、竹と紙という自然からの恩恵を受けた落ち着いた町家を見て、ほっとする気持ちでいると、すぐ隣にいかにも化学的な色のどぎつい看板が眼に入って驚いたりする。自然と人工との均等が取れなくなってきているのである。

この京都に都が築かれて、すぐに千二百年あまりが過ぎているが、その名のように「平安」であったことは

ほとんどなかったといっている。洪水や戦乱、そして大火がおよんで街が崩壊したことがいくどもあった。しかし、そこから京都は、いくたびも甦ってきたのである。

現代は、科学と合理性の追求という名の破壊が進んできているように、私には思える。

遠くから見れば、東山、北山、西山の山並みとそのふところにある里、そして川のながれ、季節ごとの彩りを映して優美なすがたを、いまも残している。ふたたび、この街が京の都にふさわしい地になることを、私は願わずにいられない。

吉岡幸雄

YOSIOKA Yukio

染色家・染織史家

■経歴：1946年(昭和21年)京都に生まれる。生家は江戸時代から続く染屋。1971年早稲田大学第一文学部卒業。1973年美術図書出版の紫紅社を設立。1988年生家「染司よしおか」5代目当主を継ぐ。毎年、東大寺お水取りの椿の造り花の紅花染和紙、薬師寺花会式の造り花の紫根染和紙、石清水八幡宮放生会の「花神饌」を植物染で奉納。ほか春日大社、伊勢神宮など古社寺の伝統的な行事にも多くの仕事をしている。奈良東大寺・法隆寺などに伝わる天平時代の衣装を天然染料で再現・制作している。著書に「日本の色を染める」(岩波書店)、「日本の色辞典」「自然の色を染める」(以上、紫紅社)、「京のことは」(横野修氏と共著、幻冬舎)、「色の歴史手帖」(PHP研究所)など。



鴨川残照(写真提供：中田 昭)